

社会情動的スキルや21世紀型スキルを育成する カリキュラムの開発と実践

—実践効果の学級間比較に基づくカリキュラムの改訂—

○松永健一郎(大垣市立上石津中学校)

吉澤寛之(岐阜大学)

キーワード: 社会情動的スキル, 21世紀型スキル, 学校カリキュラム

AIの台頭により、今までの生活や教育の在り方が一変する時代となることが予想される21世紀においては、社会情動的スキル(非認知スキル)の向上が、記憶力や学力、IQなどの賢さに関する認知スキルよりも社会的成功に結びつきやすいと言われている(Heckman, 2007)。

松永・吉澤(2019)は、ある市内の小学校児童を対象としたアンケート調査の結果から、社会情動的スキルと21世紀型スキルが顕著に高い学校を明らかにし、その学校カリキュラムを分析した。その結果、教科の学習において、児童の主体性を大切に「協働的学び合い」を中核に据え、「自己調整学習(Zimmerman, 1989)」と「探求的会話を支えるグラウンド・ルール(Wegerif, Mercer, & Dawes, 1999)」に対応した指導が行われていることを踏まえ、新たな学校カリキュラムを考案している。

Carneiro & Heckman(2003)は、認知能力は8歳までに完成するが、非認知能力は後年(10代後半)でも向上できるとしている。また遠藤(2007)は、教科以外の教育的な環境が、社会情動的コンピテンス及びアウトカムに大きく関わると述べている。これらのことから、部活動など教科以外の活動の幅が大きく広がるのは中学校であることを考慮し、松永・吉澤(2019)で考案されたカリキュラムを中学校で実践し、効果を学級間で比較する。

方法

実践・分析対象者

岐阜県内A中学校6学級の生徒138名(1年生49名;2年生41名;3年生48名)を対象に2019年4月に事前調査、129名(1年生43名;2年生39名;3年生47名)を対象に同年11月に事後調査を実施した。

効果測定内容

21世紀型スキルに相当する授業場面の批判的学習態度(楠見他, 2015)、友達と会話をするスキル(山口他, 2005)、他者理解スキル(東海林他, 2012)、貢献度・所属感・信頼感(高坂, 2014)の4尺度、非認知能力に相当する集団場面で自分をおさえるスキル(山口他, 2005)、行動の積極性・能力の社会的位置づけ(赤松他, 2005)、視点取得と共感的関心(長谷川他, 2009)、根気・一貫性(西川他, 2015)の4尺度を実施した。

実践内容

事前調査では、集団場面で自分をおさえるスキルと視点取得の低さが確認されたため、カリキュラムに調整を加え、以下の実践を行った。

職員への研修 (a)背景理論の周知と予備調査結果の伝達、(b)教科の単元指導計画・道徳・特別活動・使用プリントの例の提示を実施した。

研究推進委員会との協働 (a)令和元年度の道徳の研究発表会に向けた研究の柱への理論の組み込み、(b)若手研修を実施した。

特別活動指導部との協働 (a)保護者や地域住民への背景理論の啓発、(b)夏休みの課題への本カリキュラムの適用を行った。

結果と考察

学級要因と時期要因を独立変数、上記の各尺度を従属変数とする二要因の分散分析を行った。他者理解スキルでは、交互作用が有意であり($F(5, 123) = 3.203, p < .01$)、1年X組が有意に上昇した。また、集団場面で自分をおさえるスキルでは、交互作用が有意であり($F(5, 123) = 3.903, p < .01$)、2年Y組が有意に上昇した。

その後、11月の結果が有意に上昇した原因について、学級担任に構造化面接を行った結果、リーダーを中心とした学級経営や、リーダー指導が行われていることが明らかとなった。そのため、これらの観点を踏まえ改訂したカリキュラムが新たに考案された(Figure 1)。今後は、本カリキュラムを実施し、その効果検証が求められる。

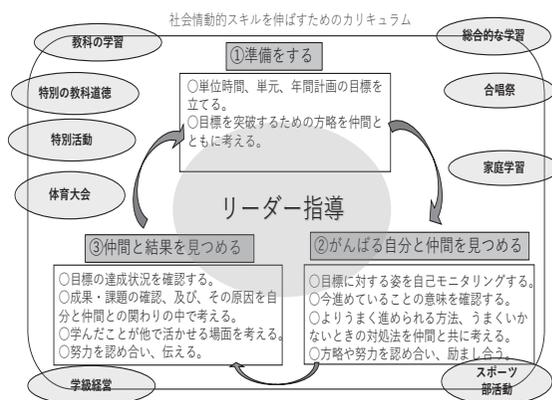


Figure 1 本結果を踏まえた改訂版学校カリキュラム